

一五、福富家宛書翰貼込帳

解説

この貼込帳には六通の書翰が収められている。うち四通が明治三十八（一九〇五）年に出された書翰である。私信であり、また紙幅も限られているため、それぞれの書翰について概要を説明するに止めたい。なお書翰作成年月日等の推定は（一）とし、特記しない限り消印による。

①（明治三十八年）六月七日付福富忠也宛園基祥書翰。園基祥は幕末、明治の公家であり当時は伯爵、娘は明治天皇の側室。「信丸」という人物の奉職が叶うように尽力を求め、これまでの尽力に対して感謝する旨の書翰である。

②（明治三十八年）一月二十二日付福富忠也宛森本俊子書翰。書翰中で忠也は「叔父様」となっているが、これは⑤書翰にあるように、忠由の娘が森本家に嫁いだ関係であろう。また差出人住所や本文からは、俊子が宮中勤めをしていることが察せられる。内容は日比谷公園で行われた日露戦争の祝捷会の模様や、正月休み中の家族・親族の近況である。

③（明治三十八年五月）福富忠也宛茂彦書翰。封筒には軍

事郵便の印が確認できる。本文中の「奉天会戦后今日にて六十日」という記述から、日露戦争の戦地発の書翰であり、時期も消印と符合する（奉天会戦は同年三月）。茂彦が駐留していた揚屯はロシア軍と対峙する前線にありながら、「日々徒然二苦ミ居」と書き綴られている。奉天会戦が日露戦争最後の会戦だったことがよく分かる書翰。

④（明治三十八年）六月十九日付福富きま（喜満子）宛石原豊子書翰。差出人住所には「一位局奥」とあるが、一位局とは明治天皇生母の中山慶子のこと。「旦那様」（一位局）および喜満子古稀の年賀にあたり、それぞれ晒、白地帷子・赤地紋など御祝儀の品が下される、という内容である。

⑤十二月一日付福富忠由宛沼尾一叟書翰。忠由の娘と滋賀県九等警部森本一行との婚儀について、滋賀県権令籠手田安定に代わり世話することを伝え、婚儀当日の段取りを確認したものの。年欠だが、籠手田安定が滋賀県権令だった時期（明治八年四月～十一年五月）から明治八十年と推定できる。

⑥七月一日付福富忠由宛沼尾一叟書翰。忠由への返書であり、申越しの件を了承し、併せて森本家に嫁いだ忠由の娘の様子を伝えている。